

編集後記

本号より編集委員長の大役を仰せつかることになった。基本的には代々の編集長による編集の積み重ねで自ずと生じている「伝統」を踏襲するということになるはずである。ただしヴァラエティ重視の前号とはやや趣を異にして、「論文」「エッセイ」「書評」の三本立てというシンプルな構成にしてみた。「論文」に関しては、本号より、昨年度大会の講演とシンポジウム発表の内容を、記録としてではなく査読論文として掲載する方針を採用している。本号の新機軸である「エッセイ」は、学会内外の三人の執筆者に、「特集」という枠で原稿をお寄せいただいた。個人的に長年その文章を愛読している方々の原稿を掲載できて望外の喜びである。そして現在、第一線で活躍される研究者を評者として迎える「書評」は例年通りの構成である。同時に、例年にも増して日本人著者のものも含めた重厚な文化的歴史研究を多く取り上げることができたのは何より嬉しい。本誌の学術的水準の維持と読み物としての豊かさの実現という編集方針が、ある程度実現できていれば幸いである。

一方で、一般投稿論文の採用はゼロに終わった。四篇の投稿論文を通常通り査読した結果であり、もちろん残念ではあるが、論文査読という制度に、個人的な感情や何らかの外的な配慮、都合などが介在する余地はない。今回不採用だった投稿者には、査読コメントを参照の上、来年度の再投稿を検討いただきたい。

最後になりましたが、ご多忙中充実した原稿をお寄せくださった学会内外の執筆者の方々、そしてご尽力いただいた編集委員の皆様に厚くお礼を申し上げます。
(編集委員長 田中裕介)